

地震と津波から 3 年目を迎え、岩手県野田村にも少しずつ変化が見られ始めています。4 月半ばには、チーム北リアスのメンバーと商工会青年部や役場の若手職員が、役場の担当課の職員の説明を受けつつ、復興計画について意見交換を行いました。何度か開かれてきた会合ですが、回を重ねる毎に、少しずつ議論が活発になってきているようです。

4 月末には、ようやく咲き始めた桜を愛でて、仮設住宅の住民の皆さんが企画された花見が催されました。たまたまその時に仮設を訪問していた NVNAD のメンバーも、誘われて仲間に加えて頂きました。

また、チーム北リアスに関わる学生が村の中心部で開いた書道体験交流会には、「そろそろ落ち着いて字を書いてみたい」という方々など、これまであまり接点のなかった皆さんがたくさん参加され、和やかな場が生まれました。

3 月に開設された大阪大学野田村サテライトでは、毎月 11 日にセミナーが開かれており、ボランティアとして関わってきた学生たちの少し違った姿も見られるようになってきています。

こうした変化の中で、NVNAD のボランティア活動も変化していきます。現状では、「見えにくい（見えていなかった）」住民の皆さまへの配慮がますます求められているように思います。仮設住宅にお住まいの方々は、お茶会などを開けば出てこられますし、出てこられなければ訪問してみることもできますから、まだしも「見えやすい」方々です。それに対し、津波で家は流されたけれども別の所（例えば、見なし仮設）に住んでおられる方々、施設に入っておられる方々、家の被害はあってもそのまま住んでおられる方々、そして、特に大きな被害のなかった方々は、「見えにくい（見えていなかった）」方々です。

こうした様々な方々がおられるのがコミュニティであり、コミュニティの復興が進むためには、多様な方々の声にもっと耳を傾けるボランティア活動がますます必要になっているように思います。

また、津波の犠牲になられた方々はもちろんのこと、これまで野田村を築いてこられた故人の方々の” 声 ” にも耳を傾けたい場面です。例えば、野田村の伝統行事の 1 つに、「なもみ」（鬼の面をかぶり、怠けている子どもを躡けていく小正月行事です）があります。保存会もあり大切にされています。こうした伝統は、長い時間かけて培われたものであり、それに込められた故人の想いを引き継いでいくことが、野田村に住むというアイデンティティを高め、復興に繋がると思います。よそ者であるボランティアも、伝統行事の周辺で色々とお手伝いできそうです。NVNAD では、これからも被災地の変化に応じて、できるかぎり細やかな工夫をしながら、被災地に寄り添っていきたいと考えています。今後ともどうぞよろしくお願ひ申し上げます。（理事長 渥美公秀）